

「大伴の三津の松原掻き掃きて」再考

——好去好来歌反歌の論——

上野 誠

はじめに

一、大伴の三津の松原の清掃

二、待つ妹と床の払ひ

おわりに

従来、好去好来歌は、かつて遣唐使であった憶良の実人生と重ね合わされ、遣唐使壮行歌として、公的部分に焦点を定めた読解がなされてきた。もちろん、力点が公的部分にあることは間違いない。しかし、反歌二首から好去好来歌を読み返してみると、そこには自己を卑下し、笑いを提供しようとする憶良の作歌姿勢を垣間見ることができる。

本論文は、その第一反歌論である。「大伴の三津の松原を清掃して待ちましよう」という第一反歌の真意はいつたいどこにあるのか、以下の側面から考究した。「清掃という労働の特質」「待つ妹の嘆きの歌の伝統」さらには「床の清掃の歌々の展開」から、その読解を試みた。本論の結論は、憶良は自己を待つ妹に仮構して、第一反歌を構成しているのではないかと推考した点に集約することができる。端的にいえば、大伴の三津を掻き掃く我々憶良は、床を清掃して背の掃りを待つ妹を想起させるものであった、と思われるのである。

ベッドの塵をはたいて清め

アナタを待つのもよいけど……

ワタシが待つのは

アナタを乗せた船舞い戻る

難波^{なにわ}の津 大伴の三津の松原

その松ではないけれど

今か今かと待ってます

さあさあ早く お帰り下さいましよ

ワタシの愛しい旦那さま――

ワタシの愛しい旦那さま――

はじめに

予備的考察として

あり得る話ではないけれど、もし、公務で三年間、自分（男性―筆者）がアメリカで働くことになったとしよう。その準備中のことである。スマートフォンに一通のメールが届いた。そのメールには、

あなたの旅立つ空港には、毎日毎日行きますわ。お帰りを今か今かと待ちわびながら、空港を掃いて清めて待つてまーす。お早く、お帰りあそばせ♥

と書かれていたとする。すると私は、次のことを一瞬のうちに考えるはずである。

① 空港の職員でもないのに、空港の清掃をして待つているということなどあり得るはずもないことである（**虚偽事実の推定**）。

② 空港での清掃などあり得るはずもないことならば、誇張表現、比喻表現の可能性を考え、そのなかで虚偽の事実を表現した理由を考える（**表現の真意を把握**）。

③ 現実上あり得ぬ話であるならば、このメールは待ち焦がれる思いをユーモラスに表現したものであると認知する（**真意と意図の認知**）。

こういったメールのやり取りが可能なのは、少なくともメールの送り手とメールの受け手との間に、すでに親密な人間関係があるからである。社会階層の上下関係があったとしても、いわば気心の知れた仲であるならば、許容される内容であろう。また、メールの送り手が男性であった場合は、メールの送り手は、その身を女性に仮構して遊んでいる、と私なら考える。この場合、おまえさん待ちわびる愛人もいるんじゃないかというような揶揄の気持ちをは

読解すべきかもしれない。

本稿のめざすもの

術学趣味もはなはだしい書き出しとなつてしまったことを、まづもつて読者にお詫びしたい。しかし、それには理由がある。遣唐使という国家の命運を荷う対外使。その命を賭しての旅路を前に、渡唐経験のある憶良が絶唱した歌であるという先入観をもつて、好去好来歌を読解したくないからである。そういう先入観が、憶良が意図して長反歌に仕掛けている笑いの構図を見えなくしてきたのではないかと、私は懸念している。

言霊の発動と神々の加護を高らかに歌い上げる冒頭から展開部。ところが、反歌になると、旅ゆく背を待つ家なる妹の歌のように読めてしまうのである。少しでも万葉歌に親しんだことのある人なら、類型があるので、そう読めてしまうのである（伊藤一九八四年、初版一九七六年、初出一九七三年）（三田二〇一二年）。その「大伴の三津の浜辺に 直泊てに 御船は泊てむ つつみなく 幸くいまして はや帰りませ」という長歌の結びに呼応して、響き合つて、反歌二首は展開されているのである。「はや帰りませ」は壮行の辞の常套句で、女性語ではないけれども、文脈によつては妹が背を送る言葉であるかのように聞こえ

てしまう言辭である。すると反歌二首も、帰国を待つ女の歌であるかのように読めてしまうのである。本稿では、第一反歌の表現をつぶさに観察することによつて、憶良が長反歌に仕掛けた笑いの構図を読み解きたい、と思う。

なお、第二反歌については、前拙稿「『紐解き放けて立ち走りせむ』再考——好去好来歌の笑い——」（『文学』五・六月号所収、岩波書店、二〇一五年）において述べた。ご併読を賜れば、幸甚この上ない。

好去好来の歌一首「反歌二首」

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は
皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ
言ひ継ぎひけり 今の世の 人もことごと 目の前に
見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光
る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下
奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨へ反
して、大命と云ふ 戴き持ちて 唐の 遠き境に
遣はされ 罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神留
まり うしはきいます 諸の 大御神たち 船舳に
へ反して、ふなのへにと云ふ 導きまをし 天地の
大御神たち 大和の 大國御魂 ひさかたの 天のみ
空ゆ 天翔り 見渡したまひ 事終はり 帰らむ日に

は また更に 大御神たち 船舶に 御手うち掛けて
墨繩を 延へたるごとく あぢかをし 値嘉の岫より
大伴の 三津の浜辺に 直泊てに 御船は泊てむ つ
つみなく 幸くいまして はや帰りませ

反歌

大伴の 三津の松原 掻き掃きて 我立ち待たむ は
や帰りませ
難波津に 御船泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて
立ち走りせむ

天平五年三月一日に、良の宅にして対面し、献る
は三日なり。 山上憶良

謹上 大唐大使卿 「記室」

(巻八の八九四〜八九六)

一、大伴の三津の松原の清掃

大伴の三津の松原

大伴の三津が、難波津と同地であることは、第一反歌と第二反歌を見れば自明なことである。同港に対して、両方の呼称が用いられていたのであろう。大伴の名が冠せられるのは、港の開発と管理が、大君の伴たる大伴氏に委ねられていた時代があったからである。憶良在唐歌には、

山上臣憶良、大唐に在りし時に、本郷を憶ひて作
る歌

いざ子ども 早く日本へ 大伴の 三津の浜松 待ち
恋ひぬらむ (巻一の六三)

とあり、憶良の時代においては、住吉に代わって、まさに遣唐使船の港であった。近注では『新編全集』が注意を払ったように、「松」と「待つ」が掛け言葉となっている。その松原は、おそらく海上からもあざやかに見えたので、出港時には「見送りの松」に、帰港時には「出迎えの松」になったのであった。見送りの松として海上から名残りを惜しめばこそ、その出迎えを受けたいと願ったのであろう。^①
「いざ子ども」という呼びかけは、帰国船の乗船者に対する檄であり、あの大伴の三津の松原をもう一度見ようと呼びかけたのであった。安全な帰国への思いを直接歌い込むのではなくして、間接的に表現しているとみてよいだろう。「大伴の三津に帰らむ」ではなく、「大伴の三津の浜松待ち恋ひぬらむ」とした方が、景が思い浮かび、そこから情感が生まれてゆく。と同時に、大伴の三津の松が待つという表現は、帰国者たちを、港の懷に包み込み、抱くような効果をもたらしているといえよう。あたり前のことだが、遣唐使船は男たちの船である。その男たちは、本郷の家々

に妹を残しているはずだから、「待つ」と言った時に想起されるのは、妹であることはいうまでもない。旅と家との対比構造は、遣唐使関係歌においても顕著なのである。ここで確認しておきたいのは、好去好来歌第一反歌の「三津の松原」の「マツ」も、「待つ」に掛かっているということである。

我立ち待たむ

そういう眼で、「我立ち待たむ はや帰りませ」という句を見ると、待つ女の声のごとき印象を伴って読めてしまうのである。立って待つとは、待つ思いが強いがゆえに、今か今かと待つさまである。用例を閲すると、そのほとんどは、

久迹京に在りて、寧楽の宅に留まれる坂上大嬢を
思ひて、大伴宿禰家持が作る歌一首
一重山 隔れるものを 月夜良み 門に出で立ち 妹
か待つらむ (巻四の七六五)

この月の ここに来れば 今とかも 妹が出で立ち
待ちつつあるらむ (巻七の一〇七八)

のような女が待つ歌なのである。管見の十八例を見ると、男が待つ歌は三例（巻二の一〇七、巻十一の二七七六、巻十九の四二五三）。題詞、歌の内容から性別の判断がつかぬものが二例ある（巻十二の三一九五、巻十四の三四〇六）。残りの十三例は、女が立って「待つ」例である。もちろん、数だけで考えるのはよくないけれども、傾向に偏りがあることは明白である。繰り返しとなるが、こういった偏在にも家なる妹と旅ゆく背という万葉歌の対比構造の存在を認めなければならぬだろう（伊藤 一九八四年、初版一九七六年、初出一九七三年）（三田 二〇一二年）。妹が家で背を待つ場合、その身だしなみとして、家の内外や寝室の清掃をすることと飾ることは、実際にも行われたことであろうし、歌のなかにも表れている。

思ふ人 来むと知りせば 八重むぐら 覆へる庭に
玉敷かましを (巻十一の二八二四)

もちろん、これは反実仮想の歌である。反実仮想は、誇張表現を伴うものだから、玉を敷いてお迎えしたいくらいに、あなたを慕っていますという点に思いの力点はあるはずである。早くに中西進は、「掻き掃きて」という表現の第一義とすべき点を、次の二首から考えようとした（中西

一九七三年」。

太上皇、難波宮に御在しし時の歌七首「清足姫天皇なり」

左大臣橘宿禰の歌一首

堀江には 玉敷かましを 大君を 御船漕がむと かねて知りせば

御製の歌一首「和へ」

玉敷かず 君が悔いて言ふ 堀江には 玉敷き満てて 継ぎて通はむへ或は云ふ、「玉扱き敷きて」

右の二首の件の歌は、御船江を汜り遊宴せし日に、左大臣の奏せると御製となり。

（巻十八の四〇五六、四〇五七）

右の二首は、元正天皇の難波宮行幸に際して詠まれた贈答歌である。中西は、この贈答歌をとらえて、

賓客を迎えるときの礼儀として玉を敷く、かき掃く、ということであろう。しかしその美しくしつらえるということの上に、憶良の歌には「御津の松原」という存在が重くかかっているのを感じる。清浄に——あの

万葉人にとつて「清」に、松原を保ちつつ待つということとは、根底に右に見て来たような景の生命感が在しないだろうか。「待つ」ということは、「早帰りませ」ということばと共用されるそれは、虫麻呂の「早く来まさね」「迎へ参出む」とひとしい。

（中西 一九七三年）

と述べている。「玉敷かましを」は、『万葉集』では、愛する人や尊く思う人士の来訪を嬉しくも思い、光栄にも思う気持ちを表す常套句である。来訪への感謝や謙讓の気持ちを表す表現ではあるが、取りようによっては大げさな表現といえよう。

清掃という労働の特質

「玉を敷く」という飾りたてる行為が、来訪者への気持ちを表すならば、「大伴の 三津の松原 掻き掃きて」も同じであろう。窪田『評釈』（一九八四年、初版一九四三年）が、『かき掃き』は、『かき』は接頭語、『掃き』は、掃き清めてで、憶良自身する意である。広成に対する敬意からの云ひ方である」と述べているのは、その表現の側面を鋭く突いたものであるけれども、裏を返せば、大仰な表現であるともいえる。常識的に考えて、七十を越え、一

応貴族の列に加わった老人、しかも病を得ていると思われる憶良が、大伴の三津の清掃を行うとは考えにくい^①。当然、実際にはあり得ないことを前提として、第一反歌は成り立っているのではないか（虚偽事実の推定）。その際、憶良は自らの身を「待つ女」に仮構していたのではなからうか。ならば、清掃とは、いかなる労働であつたのか、具体的に考えねばなるまい。

基本的に、前近代までの社会において、清掃は女性労働であり、家内の清掃もまた、戦後に至るまで、主として女性労働であつた。ただ、単純に女性労働であつたといつても、それは実相を捉えた説明にはなっていない。次のように、その関係性を説明しておかなくてはなるまい。清掃、水汲み、衣服生産、洗濯といった労働は、優位者と劣位者がいた場合、常に劣位者が行う労働なのであつた。社会階層の上層が優位者であるならば、社会階層の下位者は劣位者となる。かくなる場合、清掃、水汲み、衣服生産、洗濯は社会階層の下位者の仕事となる^②。男性が優位の性であるなら、女性は劣位の性となる。この場合、清掃、水汲み、衣服生産、洗濯などは、女性労働となる。

櫛木謙周は、古代宮都における清掃を富の再分配という経済的側面だけでなく、社会秩序を確認する表象としても捉えようとしている（「櫛木二〇一四年」）。つまり、清掃を

する側（劣位者）と奉仕される側（優位者）が、労働によって可視化されることを重要視しているのである。と同時に、そこに清浄な空間を出現させれば、それは古代的な公共空間とも成り得る。そういった清掃作業を通じて、古代的公共性が生成されていたことを鋭く指摘した論である。清穢の觀念の形成や差別構造の解明にもつながる卓れた史論といえよう。以上のように考えてゆくと、港の清掃をして待つという歌は、歌を献上した丹比広成への敬意を込めつつも、それをユーモラスに表現したものとみなしてはなるまい。

上下関係の可視化

これまで、清掃が劣位者の労働であることを縷々述べてきたわけだが、こういった社会通念を逆手に取って意図的に心意を可視化することもあつた。いわゆる天平十八年（七四六）の正月の雪掃きがまさにそうである。

天平十八年正月、白雪多く零り、地に積むこと数寸なり。ここに左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣また諸王諸臣たちを率て、太上天皇の御在所〔中宮の西院〕に参入り、仕え奉りて雪を掃く。ここに詔を降し、大臣参議并せて諸王は、大殿の上

に侍はしめ、諸卿大夫は、南の細殿に侍はしめて、
則ち酒を賜ひ肆宴したまふ。勅して曰く、「汝ら
諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、各その歌
を奏せよ」とのりたまふ。

左大臣橘宿禰、詔に応ふる歌一首

降る雪の 白髪までに 大君に 仕へ奉れば 貴くも
あるか
(巻十七の三九二二)

左大臣以下、大納言、諸王諸臣の元正太上天皇御所西院
での雪掃きの奉仕は、臣下の忠心を表すものである。奉仕
される太上天皇と奉仕する臣は、雪掃きという労働を通じ、
可視化されるのである。対する太上天皇は、その忠心に応
えるかたちで、酒肆宴を賜うたのであった。したがって、
日常的に大臣たちが雪掃きをしたり、太上天皇居所の清掃
作業を行っていたわけではない。新年であり、しかも豊年
の兆しとなる白雪が降ったから特別に雪掃きを名目として
参内したのであるが、それは太上天皇への敬愛の念を表現
する、いわば儀礼として機能したのである。むしろ、「大
臣も、太上天皇さまの前にあつては、一下僕にすぎませ
ん」とのメッセージが、この雪掃き参集という行動によつ
て表現されたはずである。まさに、心意の可視化である。

このような議論を重ねてきたのは、清掃をさせる側(優

位者)と清掃奉仕をする側(劣位者)の間にある力学を確
認しなかったからである。

じつは、契沖『代匠記』初稿本(二六八七年成立)は、
そういう力学をどうも認識していたようなのである。

史記孟子荀卿列伝曰。騶衍如燕昭王擁彗先驅。(索隱
曰。彗帚也。謂為之掃地。以衣袂擁帚而却行。恐塵埃
之及長者所以為敬也。)

〔萬葉代匠記 三〕久松潜一ほか校訂『契沖全集』
第三卷、岩波書店、一九七四年)

そこで、契沖の引用する『史記』孟子荀卿列伝の部分を
見てみよう。

是を以て騶子齊に重んぜらる。梁に適く。恵王郊迎し
て賓主の礼を執る。趙に適く。平原君側行して席を撤
ふ。燕に如く。昭王彗を擁して先驅し、弟子の座に
列して業を受くるを請ひ、碣石宮を築き、身親ら往
いて之を師とす。主運を作る。其の諸侯に遊びて尊礼
せらるること此くの如し。

〔孟子荀卿列伝〕水沢利忠『史記 九(列伝二二)』
(新釈漢文大系第八十九巻) 明治書院、一九九三年)

当該部分は、騶子が各国に遊説した時の話である。名聲鰻昇りの騶子を各国の王がいかにかに丁重に遇したかが語られている部分である。王たちは、城外まで出迎え、体を屈めて先導し、自らの袖をもって椅子を拭いて、賓主の礼をもって、騶子を迎えたところ。そのなかで、昭王は自ら棼すなわち箒をもって先導し、弟子の座に着いたと記されている。箒をもって先導するのは、燕の国王といえども、師に対する礼をもって接し、上席を騶子に譲ることを表しているであろう。昭王は箒を手にすることによって、劣位者の立場にあることを自ら表明したのである。契沖が引用している唐・司馬貞の『史記索隱』の注記部分も、そのことを表している。まさに、上下関係の可視化である。

憶良が『史記』孟子荀卿伝を踏まえて、「掻き掃きて」と歌ったとは思えないけれども、少なくとも、契沖は箒を持った昭王の姿を当該歌から想起し、引用したのであった。清掃して待つことに謙譲の意を感じ取ったのだろう。

二、待つ妹と床の払い

床敷きて我が待つ君を

迂遠な議論を重ねてしまったが、冒頭の①②③に対応して考えれば、

① 憶良自身が港の清掃することなど、実際にはあり得ない（虚偽事実の確認）。

② 憶良自身の清掃などあり得るはずもないことならば、それは一種の誇張表現であると考えざるを得ない（表現の真意を把握）。

③ それは、待ち焦がれる気持ちをユーモラスに歌った表現であると考えるべきである（心意と意図の認知）。

となろう。しかも、それは、待つ妹を仮構しているようなのである。背を待つ妹の清掃ということを念頭に、『万葉集』を閲してみると、床を払い清めることが、待つ妹のたしなみとして歌われている。心地よい床を、やって来る背に提供することは、家なる妹の身だしなみの一つと考えられていたようなのである。まず、床を敷くという行為そのものが、背を持つことなのであり、

赤駒^{あかこま}を 厩^{うまや}に立てて 黒駒^{くろこま}を 厩^{うまや}に立てて それを飼ひ 我が行くごとく 思ひ妻 心に乗りて 高山の峰のたをりに 射目^{いめ}立てて 鹿猪^{しかじ}待つごとく 床敷きて 我が待つ君を 犬な吠えそね

〔反歌省略〕

（卷十三の三二七八）

のような歌も見出すことができる。ここでは「床を敷く」と表現している。妻訪い婚においては、間々このようなこともあったのだろう。犬が吠えて、困ったことになってしまふ。吠え声で、近所の人びとに知られてしまうようなこともあったからこそ、こういう歌も歌われるのであろう。

「床打払」

そして、その床は、当然清浄なものがよいわけで、床を清掃して背を迎えるはずである。次に挙げるABC三例は、床を払い清める歌である。

A

大伴宿禰家持が坂上大嬢に贈る歌一首「并せて短歌」
ねもころに 物を思へば 言はむすべ せむすべもなし
妹と我と 手携はりて 朝には 庭に出で立ち
夕には 床打ち払ひ「床打払」 白たへの 袖さし交へて
さ寝し夜や 常にありける あしひきの 山鳥こそば
峰向かひに 妻問ひすといへ うつせみの 人なる我や
なにすとか 一日一夜も 離り居て 嘆き恋ふらむ
ここ思へば 胸こそ痛き そこ故に 心なぐやと
高円の 山にも野にも 打ち行きて 遊びあるけど
花のみに にほひてあれば 見るごとに

まして偲はゆ いかにして 忘るるものぞ 恋といふものを

「反歌省略」

(巻八の一六二九)

B

ま袖もち 床打ち払ひ「床打払」 君待つと 居りし間に 月傾きぬ (巻十一の二六六七)

C

我が背子は 待てど来まさず 天の原 振り放け見れば
ぬばたまの 夜も更けにけり さ夜更けて あらしの吹けば
立ち待てる 我が衣手に 降る雪は 凍り渡りぬ
今更に 君来まさめや さな葛 後も逢はむと
慰むる 心を持ちて ま袖もち 床打ち払ひ「床打払」
現には 君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ
天の足る夜を (巻十三の三二八〇)

Aは、家持の大嬢に贈る歌であるが、そのなかで、せつかくの新婚生活も多忙で、それを樂しむことができないと嘆いているところがある。A歌で、家持が心から希求したものは、朝には手を繋ぎあつて、庭に遊び、夜には床を清めて袖をさし交わして寝ることであつた。

Bは、待つても待つてもやって来ぬ「君」への嘆き節である。もちろん、そういう思いを聞き手、読み手に訴えかける歌であることは、いうまでもない。ま袖とあるからには、両袖を使つて丁寧^{ていねい}に床をはたき、清めるのであろう。片袖では、相手を軽^{かろ}んじることになるから、両袖でねんごろに塵を払い清めるのである。しかも、それは他人に命じるのではなく、自らの両袖で行なつてこそ真心が伝わるものと考えられていたようなのである。

Cも、Bと同じく待つてもやって来ぬ「背」への嘆き節である。こちらにも、Bと同じくま袖を使つて床を払い清めるとある。

一方、背がもうやって来ないとわかつていた場合もあるはずだ。来訪があり得ぬことが分かった上で、床の塵を払えば、それはなすところない独寝の嘆き節ともなった。Dは、その例である。

D

明日^{あす}よりは 我が玉床^{たまどこ}を 打ち払ひ〔打払〕 君と寝
ねずて ひとりかも寝む (巻十の二〇五〇)

E

夕されば 人なき床^{とこ}を うち払ひ 歎^{なげ}かむためと な

れるわが身か

『古今和歌集』恋歌五、巻十五の八一五)

Dは七夕歌であり、逢瀬の後の気分を祭りが済んだ後の寂寥感のごとき感情として歌っている。Eは、わが身を思うやるせなさが表現されている歌である。

万葉びとの恋情表現が後代の和歌よりみれば、より直截的かつ具体的であることは、異口同音に諸家が指摘してきたところである。家のなかでも、閨房(寢室)。閨房のうちでも、床・枕・床辺・枕辺が、愛する背を偲ぶ事物や場所として、堂々と描かれ、偲びのよすがとされている点は、万葉歌の特色の一つといえるかもしれない。きわめて、具体的なのである。床・枕・床辺・枕辺は、不在の背を偲ぶよすがとなるとともに、それが相聞歌、死者への相聞歌ともいえる挽歌に共通しているところでもある。そして、それは、人麻呂挽歌以降、多くの類同歌を生みだしてゆくのであった。

一方で、床は、斎瓮を据えての斎ひの祭祀の場ともなり得る場所なのであった。むしろ、偲びのよすがともなり、恋情が収斂してゆく場所であつたからこそ、旅ゆく背の無事を祈る場所ともなったのであった。これまた具体的である。この点については、かつて述べたこともあるので再論

しないが、本稿に有利な防人の別れを惜しむ歌を引用しておこう〔上野 一九九七年、初出一九八六年〕。

防人が悲別の心を追ひて痛み作る歌一首〔并せて短歌〕

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る
おさへの城そと 聞こし食す 四方の国には 人さは
に 満ちてはあれど 鶏が鳴く 東男は 出で向か
ひ 顧みせず 勇みたる 猛き軍士と ねぎたまひ
任のまにまに たらちねの 母が目離れて 若草の
妻をもまかず あらたまの 月日数みつ 葦が散る
難波の三津に 大船に ま権しじ貫き 朝なぎに 水
手整へ 夕潮に 梶引き折り 率ひて 漕ぎ行く君は
波の間を い行きさぐくみ ま幸くも 早く至りて
大君の 命のまにま ますらをの 心を持ちて あり
巡り 事し終はらば 障まはず 帰り来ませと 斎瓮
を 床辺に据ゑて 白たへの 袖折り返し ぬばたま
の 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき
妻らは
ますらをの 軛取り負ひて 出でて行けば 別れを惜
しみ 嘆きけむ妻

鶏が鳴く 東男の 妻別れ 悲しくありけむ 年の
緒長み

右、二月八日、兵部使少輔大伴宿禰家持

（巻二十の四三三一〜四三三三）

家持は、防人の悲別を歌うにあたり、「愛しき妻ら」の
思いを歌っているのである。やはり、ここでも、旅ゆく背
と家なる妹との対比構造から歌が発想されている。その家
守る妻たちの姿を、床辺での斎ひの祭祀と、愛する背を夢
に見るための呪術である袖折りによって描いているのであ
る。万葉歌中における旅の苦難の際たるものは、独寝なの
である。数ある旅の苦難のなかでも、独寝の苦しみが中心
に歌われるのは、万葉歌そのものが、恋歌を基盤に成立し
ていることと、無縁ではない。しかも、それは、家なる妹
と旅ゆく背の対比のなかで歌われるものなのである。「床
打払」と歌い、背の訪れを待つ歌々も、そういう万葉歌の
類型のなかで、まずは考えなくてはならないのである。

床打払と舶載書の知識

縷々述べてきたような文芸の伝統があればこそ、床を歌
う中国詩を受容することもできるのであるであろう。小島憲之は、
「床打払」という表現が『玉台新詠』の張衡「同聲歌一

首」や同集の種葛篇から学ばれたものとし、

……この枕席を清める動作はやはり、「夕べには床うち拂ひ」と関係があるのではなからうか。「床うち拂ひ白妙の袖・さしかへて・さ寐し夜や」とある通り——玉臺新詠卷二種葛篇に、「歎愛在枕席、宿昔同衣衾」とある——、単に床を清潔にして待つと云つた（或は宗教的な）表現ではないと思はれる。しかもかうした男女の「合歡」の前のわざとしてかかる動作を万葉人が必ずしもやつたものとは思われず、むしろ書物から得た表現が、イデオム化して万葉歌人の世界に流行したのではなからうか。つまり「床うち拂ひ」は、もとは男女の「合ひ」に関係する句であり、舶載書の知識がやがて万葉人の表現となつてあらはれたものと思はれる。

〔小島 一九八八年a、初版一九六四年〕

と記している。そこで「同聲歌一首」を見ると、

（前略）

洒掃枕席を清め、靦芬狄香を以め。
重戸金扇を結び、高下鍙光華やかなり。
衣解かれて巾粉を御し、圖を列ねて陳枕張らる。

素女を我が師と為し、儀態萬方盈つ。

（後略）

〔「同聲歌一首」内田泉之助『玉台新詠（上）』（新釈漢文大系第六十巻）、明治書院、一九七四年〕

とある。この詩は、結婚して初夜を迎える女のたしなみを述べた詩である。初夜を迎える女は、男に尽くすべく閨房において、あらん限りの心尽くしをすると語り出す。そのなかに、枕席すなわち床を清め、皮靴には高価な舶来の香料を用い、嬌声が外に漏れないように、重ね戸は金属製のとぼそで固く締め、閨房の照明も華やかにするとある。そして、続くところには、枕絵を並べるとある。率直に感想を陳べれば、まさに、男が自らのために造型した「尽くす女」の理想像としかいいようのない代物である。

ここからは、暴論の謗りを恐れず、自らが思量するところをあますところなく開陳したい。第一反歌が長歌末尾の「はや帰りませ」を受け、待つ女に仮構されていること。さらには、第二反歌における、紐を解き走る行為の先には、宴と共寝の二つが想定されることを考え合わせるならば、第一反歌も、背を待ちわびる妹の姿を前提に歌が構想されているのではなからうか〔上野二〇一五年、前拙稿〕。港を清掃すると歌うのは、港を妹の家と見立てているのでは

ないか。家の内外や床を清掃して男を待つ妹の姿を投影して当該歌を読むのは、筆者の見た幻を語るに等しいことだろうか。読者の審判を仰ぎたい。

本稿の主張を図化すると、

港の清掃

待つ妹の家の清掃を想起させる
待つ妹の床の清掃を想起させる

となろうか。前拙稿において、筆者は第二反歌の紐解きを、

紐を解き走り

宴をする
共寝をする

と理解したが、同じ構造になっていると考えたいのである。好去好来歌の長反歌関係を分析した唯一の論文である成耆連の稿では、場面設定（x）↓心情の描写（y）↓行動（z）と反歌の構成を分類・分析して、

x 大伴の三津の松原



難波津に御船泊て

ぬと聞こえ来ば

y 掻き掃きて

z 我立ち待たむはや帰りませ



紐解き放けて
立ち走りせむ

という共通の構造があるとする（成一九九六年）。私は、同種の構成法はいくらでも他に類例を見出し得るので、意図的になされたものとは思わなくても、反歌二首は内容において響き合って、長歌と連動しているように思われる。反歌二首まで読んで来て、どんでん返しを食らうように作られているのである。反歌二首まで読み終えたと、この好去好来歌の「オチ」は、ここにあったのか、と気付く仕掛けになっているのである。前半部はなんだか重々しくて神妙だったが、なあんだ笑わせ歌だったのだなあと、はつと気付かせるように、仕組まれているのではなからうか。緒言において述べた、「憶良が意図して長反歌に仕掛けている笑いの構図」とは、このどんでん返しのことを指す拙辞なのであった。

おわりに——宴席歌の芸

長歌の「人さには 満ちてはあれども 高光る 日の大 朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて」の部分に着目して、広成が丹比家の家の子であることが強調されるのは、憶良と広成の個

人的關係に起因するのではないかとする説がある〔菊地一九八四年〕。推定の部分は多いとしても、私は、菊地論文を卓論だ、と思う。

大使広成は嶋の第五子であった（『続紀』）。よって、広成を「家の子」と詠んだのは、そのこと自体誤りではないが、広成が大使に任命されたのは、別に丹比家の出身だったからではないであろう。養老時には、広成の兄の県守が押使に任命されているが、広成自身、『懷風藻』に三首の詩を残すほどに漢文学にも造詣が深く、また任官以前には、下野守、迎新羅使左副將軍、越前守、能登、越中、越後の按察使などを歴任しており、大使任官は広成個人の資質によるところ大であったと思う。憶良が広成を「家の子」といい、その父嶋の事績にまで溯って、大使任命のことをうたったのは、この歌の発想そのものが、憶良の極めて個人的なところに起因するからではなからうか。

〔菊地 一九八四年〕

さらに菊地は、好去好来歌が、三月三日の丹比家での宴で披露されることを前提に制作されたのだとする。

私は、菊地論文を受けて、以下のように推考する。この

〔長歌「人さには……」部分は、宴に参集するであろう丹比家の人びとに配慮した部分なのではなからうか。このように表現すれば、広成だけでなく丹比家の人びと歴代の榮譽も讃えられるわけである。だとすれば、書簡に書かれた長歌を読み上げるかたちで、好去好来歌は公表されたはずである。宴の参会者たちは、長歌の末尾が読み上げられると、何やら大げさな表現が登場したことに驚いたことだろう。そうして、反歌二首まで読み上げられると、いつの間にやら好去好来歌は笑わせ歌となっているではないか——。そういう仕掛けがあるのではなからうか。

宴で披露される長歌を制作する場合、制作者はまず二つのことを考えるであろう。一つは、宴席の主旨にあっているか、どうか。もう一つは、聞き手の集中力が途切れないように、最後まで聞いてもらえるか、どうか。初期万葉の小型長歌ではあるけれども、額田王の春秋競憐歌（卷一の一六）は、春派、秋派の心を左右に揺らしておいて、最後には、「しつかり」「きつぱり」と自らの主張が述べられて終わる。同じく、どんでん返しだ。しかも、読み終わると、額田王は、はじめから秋派だったと分かるように仕掛けられているのである。梶川信行は、そういう歌のあり様を捉えて、これを歌人の芸と見た方が、より実相に近いのではないかと論じている〔梶川 一九九七年〕。

梶川の言に倣えば、反歌二首の配置にこそ、憶良の芸があるのかもしれない、と思う。冒頭に示したのは、本論の解釈案を誇張して作成したお座敷歌、俗謡仕立ての釈義である^⑩。これまた銜字趣味のなせる業ながら、行きつ戻りつ迷走した拙論の理解の一助とされたい。迂遠な記述と、危うい解釈案に、忸怩たる思いも残るが、主張したいことは述べ切った。以て、審判の日を大伴の三津の松原を掃き清める気持ちで待ちたい、と思う。

注

- (1) 「見送りの松」のようなものを山に求めるならば、その山は、生駒山であろう。それは、水平線に最後に消えるのは生駒山の山頂だからである。「難波津を漕ぎ出て見れば 神さぶる 生駒高嶺に 雲そたなびく」(巻二十の四三八〇)や、『住吉大社神代記』の「胆駒山神奈備山本記」に住吉の神が生駒山を領有する話がある。住吉の大神が、生駒山を領有するのは、難波、住吉から出港した場合、最後に水平線に沈む見納めの山だったからであろう。
- (2) 巻三の四四三、巻四の七六五、巻五の八九五、巻七の一〇七八、巻七の一四二二、巻十の二〇八三、巻十二の二九二九、巻十二の三一九五、巻十三の三二八〇、巻十三の三二八一、巻十四の三四五五、巻十六の三八六一、巻十七の三九七八。
- (3) こういった謙譲によって敬意を表する例としては、巻六の一〇一三、巻十九の四二七〇がある。
- (4) もちろん、それは文脈の中で解決すべきことからではある

けれども、この場合については、常識の範囲で考えてもよいだろう。

- (5) たとえば、洗濯も戦前までは女性労働であった。これは、文化を越えたレベルの汎世界的労働習慣であった。したがって、資本主義下において賃金労働が普及しても、洗濯は女性職業の労働であったのだ。かえりみて、万葉歌を見ると、旅ゆく背が洗濯に言及する場合、例外なく、それは望郷の言となり、妻恋の言となっている。ために、布の白さに言及する表現がある場合、多くの場合、布を白くするための河川での布さらしの女性労働が想起されていることを忘れてはならない(上野二〇〇四年)。描かれた文芸世界と実生活の回路を常に模索し、その関係性を、清掃についても考えてゆくべきだろう。

- (6) 「玉帯 刈り来鎌麻呂 むろの木と 棗が本と かき掃かむため」(巻十六の三八三〇)は、男性が日常行わない清掃に従事するところに、歌の妙があり、その名を題によって鎌麻呂としたところにおもしろさがあるのである。

- (7) 巻十三には、背を寝取られて激しく嫉妬する女歌があるが、寝取った相手を攻撃する言葉のなかに、寝屋の貧弱さ、腕の不格好さとともに、「破れ薦を敷きて」と床が破れていることが挙げられている(巻十三の三二七〇、三二七一)。これは、心地よい床を提供できない女はダメ女であるという考え方があったからであろう。

- (8) この歌について、小島憲之は、中国詩においては、織女が牽牛のもとを訪れるのであり、日本の生活習慣の違いに基づくものであることを指摘している。したがって、中国詩においては、二〇五〇番歌の嘆きは牽牛の嘆きであると指摘して

いる。

そこに彼此文学の差があり、万葉集の二星の会合は、男が女人の許に行くこと云ふ地上の現実のそのままの反映である。これは作家位相、文学形態の差なども一つの原因であらう。この点に於て懐風藻の詩は中国詩の模倣であり、行動を起すのは織女星である。万葉集の七夕歌は七夕詩と差があるにも拘はらず、なほ全般よりみれば、七夕詩に得た点もあり、この詩想を歌にこなし、現実に即して詠むために、万葉歌人としての努力が必要であつた。

（小島 一九八八年c、初版一九六四年）

（9）なお、第一反歌と第二反歌に異質性を認め、断層を想定する意見がある。中西進は、

第一反歌は先に述べた正訓字が多い部分と似かよい、第二反歌は、「難波津」「紐解」だけ、極端にいえば「難」「紐解」だけが仮名書きでないだけで、他はすべて一字一首である。また、第一反歌では「大伴の御津」といい、同じ場所を第二反歌では「難波津」という。同じ時、同じ条件でつくりながら、なぜこう違うのか。さらには第一反歌は格式にあった儀礼性をもっているのに、第二反歌は「紐解き放けて立ち走りせむ」という、卑俗ささえ感じられる歌いぶりである。たしかに「早帰りませ」「泊てぬと聞こえ来ば」と意味はつながっているが、肝心の精神に懸隔がある。

これは一体なぜか。その点を、この一篇の寿歌は、反歌一首をもつて完了しているのではないかと、考える。最初から反歌一首を添えるべく添えて歌いおわった。そしてさらにもう一首を、少し間をおいて加えたのが現形で

はないのだろうか。

（中西 一九七三年）

と述べている。つまり、用字法、同一地に対する呼称法の違い、格式を重んじた儀礼性をもった歌いぶりと一種の卑俗性を持った歌いぶりの異質性を認める立場である。対する本稿は、反歌二首に一貫性・同質性を認める立場である。反歌二首には、誇張表現による笑い、洒脱性、滑稽性が共通していると思われる。したがって、本稿は、反歌二首に異質性を認める中西説とは異なる。

（10）

近時、筆者は行論によつてゆきついた結論を釈義として示すことを心がけている。これは、職場の奈良大学の学生確保のために行っている、高校への「出前授業」を通じて思い至った、意見開陳の一つの手法である。論文の主張を盛り込んだ、強調するかたちで、わかりやすく、その主張を提示する方法として、悩んだ末に選んだ方法である。それは、むしろ、翻案に近いものであり、虚によつて実を示さんとする手法に厳しい批判があるのも事実だ。しかし、いかなる論文も、表現を実感するというレベルに至ると、個々人の感性や気分が反映されるものではないのか。近時の国文学は、解釈の精度を上げることに熱中してきたわけだが、行論の成果を示す方法の模索については、あまりにも無頓着ではなかったのか、という思いが私にはある。文芸には、個人や時代の気分を映す側面があるはずだ。その気分をも掬い上げたい、と私は思う。ただ、それは時として誤読の増幅を招くことにもなりかねないのだが。

参考文献

伊藤 博

一九八三年

『貧窮問答歌の成立』『萬葉集の歌人と作品 下（古代和歌史研究4）』塙書房、初版一九七五年、初出一九九九年

一九八四年

『家と旅』『萬葉集の表現と方法 下（古代和歌史研究6）』塙書房、初版一九七六年、初出一九七三年

稲岡耕二

二〇一〇年

『山上憶良』吉川弘文館

上野 誠

一九九七年

『人麻呂挽歌の発想―枕と床と―』『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼』雄山閣出版、初出一九八六年

二〇〇〇年

『千年の養老七年芳野行幸歌』神野志隆光・坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品（笠金村・車持千年・田辺福麻呂）』第六卷所収、和泉書院

二〇〇四年

『万葉びとの洗濯―白を希求した男と女―』高岡市万葉歴史館編『色の万葉集』所収、笠間書院

二〇一〇年

『書殿にして饒酒する日の倭歌』の論』『萬葉』第二百六号所収、萬葉学会

二〇一五年

『紐解き放けて立ち走りせむ』再考―好去好来歌の笑い―』『文学』五・六月号所収、岩波書店

太田善磨

一九六六年

『万葉時代の現出基盤の問題』『古代日本文学思潮論IV』桜楓社

荻原千鶴

二〇〇〇年

『入唐使に贈る歌』神野志隆光・坂本

奥田和広

二〇〇六年

信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品（笠金村・車持千年・田辺福麻呂）』第六卷所収、和泉書院

折口信夫全集刊行会編

一九九五年

『口訳万葉集』『折口信夫全集』第九卷、中央公論社、初出一九一六年

梶川信行

一九九七年

『芸』の世界』『万葉史の論』山部赤人、翰林書房

菊地義裕

一九八四年

『憶良と丹比家―〈好去好来歌〉の献呈―』『上代文学』第五十三号所収、上代文学会

榎木謙周

二〇一四年

『日本古代の首都と公共性』塙書院

郡司正勝

一九九一年

『歩く・走る』『郡司正勝刪定集』第三卷、白水社

小島憲之

一九八八年a

『萬葉集と中国文学との交流』『上代日本文学と中国文学 中―出典論を中心とする比較文学的考察―』塙書房、初版一九六四年

一九八八年b

『山上憶良の述作』『上代日本文学と中国文学 中―出典論を中心とする比較文学的考察―』塙書房、初版一九六四年

一九八八年c

『七夕をめぐる詩と歌』『上代日本文学と中国文学 中―出典論を中心とする

比較文学的考察― 塙書房、初版一九六四年

下田 忠

一九八一年 「好去好来歌―その呪的表現―」 『山上憶良長歌の研究』 桜楓社

成 耆連

一九九六年

「山上憶良の「好去好来歌」について―特に反歌二首を中心に―」 『武庫川国文』 第四十八号所収、武庫川女子大学国文学会

辰巳正明

一九八七年

『万葉集と中国文学』 笠間書院

鉄野昌弘

一九九一年

「秋立待」をめぐって」 『帝塚山学院大学 日本文学研究』 第二十二号所収、帝塚山学院大学日本文学会

中西 進

一九七三年

「遣唐使に餞る」 『山上憶良』 河出書房新社

永池健二

二〇〇五年

「立待考―歌謡研究からのアプローチ―」 『奈良教育大学 国文―研究と教育―』 第二十八号所収、奈良教育大学国文学会

橋本達雄

一九六八年

「初期の憶良―その歌人的性格と位置―」 『跡見学園女子大学紀要』 創刊号所収、跡見学園女子大学

林田洋子

一九七三年

「水辺の遊び―万葉集における三月上巳の頃―」 『上代文学』 第三十二号所収、上代文学会

東 茂美

二〇〇六年

『山上憶良の研究』 翰林書房

深澤昌夫

二〇〇〇年

「足もとから見る〈近松の世界〉―『冥途の飛脚』を忠心として―」 『文芸研

究』 第四百四十九集所収、日本文芸研究会

藤原茂樹

二〇〇〇年

「大唐に在りし時本郷を憶ひて作る歌と好去好来歌」 神野志隆光・坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品（大伴旅人・山上憶良（二））』 第五卷所収、和泉書院

三田誠司

二〇一二年

村山 出

一九九九年

『万葉集の羈旅と文芸』 塙書房
「車持千年の吉野讃歌」 『北海学園大学人文論集』 第十三号所収、北海学園大学

守屋 毅

一九八七年

「くるひ」と芸能―中世における諸相」 梅棹忠夫監修・守屋毅編『祭りは神々のパフォーマンス』 所収、力富書房

付記

一 ふざけた出だしにも見えてしまう拙論を大海の心を持つて採用掲載された『京都語文』の編集委員の諸先生に、お詫びとお礼を申し上げます。光栄な機会をいただきました。

ありがとうございます。

付記

二 成稿にあたっては、多くの諸先生からご教示をいただきました。

きました。芳名を連記できぬほどの多さで、無記載をご海容下さい。